

# 生き方考えるきっかけに

子ども  
たちへ

2011年3月の東日本大震災。当時、津波で被害を受けた宮城県東松島市の小5だった男女3人が、被災からこれまでを記録した『16歳の語り部』(1300円)が、ポプラ社から刊行されました。

本を監修した佐藤さんは、3人の中学時代の恩師。

被災体験をつづった「16歳の語り部」監修

佐藤 敏郎 さん 52



昨年度で教員をやめ、NP〇法人「キッズ ナウ ジャパン」(仙台市)事務局長として防災教育などに取り組んでいます。目の前で人が津波にさらわれたこと。大人たちが救援物資を奪い合っている。差が、何もわからないほど幼くはない」3人の体験談は、被災経験がない読者にも、震災が残した影

響の深刻さを感じさせてくれます。3人の話を聞いた佐藤さんは、「子どもの感覚を甘くみていた」と感じたそうです。教員として、そして一人の大人として、どのよう子どもたちを見守るべきだったのか。語り部としての3人との出会いは、自分自身を見つめ直すきっかけにもなったと振り返っています。

震災で見たことは話してはいけないのだと、心にふたをしたという男子。被災後、時に感情を爆発させることもあった女子。別の女の子は「私なんか生きてる価値がない」と感じるようになりまし。三者三様に傷ついた子どもたちは、どのようにして再び前を向き始めたのか。高校生になった3人は、その道のりを率直に語っています。佐藤さんは、この本は単なる「震災本」ではないといます。「家族や友人、進学、将来の夢。災害に遭っていないなくても、この年頃の子どもたちは、いろんな壁にぶつかるでしょう。そんな時にどう生きるのか、考えるきっかけになってくれればうれしいです」当時小6だった娘を震災で亡くした佐藤さんは、「取り戻せない命はある。だが、それでも、これから始められることもある」と語ります。多くの子どもたちに、この思いを届けたいと願っています。(郷)